プレスリリース

2026年11月17日
株式会社 MBS

映像’26「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」
第46回「地方の時代」映像祭2026
放送局部門 優秀賞 受賞



第46回「地方の時代」映像祭2026において、映像’26「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」が放送局部門で「優秀賞」を受賞しましたのでお知らせします。

【放送局部門 優秀賞】

番組名　:映像’26「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」
放送日　:2026年5月31日(日)
プロデューサー　:和田 浩（報道情報局番組センター）
ディレクター　:樋江井 亮（報道情報局番組センター）
内容　:「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」

「おはようございます」と職場で笑い合い、誰かの役に立つ。そんな当たり前の明日を夢見て、彼女は 40 件もの不採用通知を受け取ってきた。

滋賀県大津市に暮らす深田澪音さん、22歳。脳性まひによる重度障がいを抱えながらも、幼い頃から地域の合唱団へ参加。高校では生徒会活動に打ち込み、自ら障がいについての啓発イベントも企画した。その後短期大学へ進むなど、自ら社会参加の道を切り開いてきた。

しかし、前向きに就職活動に挑む彼女の前に、冷たい「制度の壁」が立ちはだかる。日常生活の介助は月数万円で済むのに、職場でヘルパーを頼むと原則助成対象外となり、月30万～40万円もの負担がのしかかるのだ。それはまるで、国から「外に出ず、家の中にいなさい」と告げられているかのような理不尽なルールだった。

ヨーロッパでは職場でのヘルパー利用を「権利」として、公的な支援制度を整えている国もあるなか、日本は2022年に国連から「職場でヘルパーを利用できるようにするべきだ」と勧告を受けた。しかし、今のところ状況は変わらないままだ。

なぜ、日本では尊厳を持って「働く」という当たり前の願いがこれほど遠いのか。ひとりの女性の静かな挑戦と就労への道のりを通して、誰もが共に生きられる社会のあり方を考える。

【受賞コメント】

・プロデューサー　和田 浩

『働いて、誰かの役に立ちたい』。障がいがある前に、ひとりの人間として生きがいを求めるのは、ごく自然な願いです。だからこそ、理不尽な壁に立ち向かう彼女の姿を『自分には関係ない』と関心の外に置くことはできません。

私たちの無関心こそが、その壁をさらに高くしてしまうからです。今後も、社会の死角に取り残され、かき消されがちな声に寄り添い、真実を伝えるドキュメンタリー制作に努めてまいります。

・ディレクター　樋江井　亮

就労時のヘルパー利用の課題は、単なる労働環境の議論にとどまらず、一人ひとりの「生存権」に関わる問題です。切実でありながら周囲からは見えにくいこうした課題に、今回の受賞が目を向けるきっかけになればと願っています。

同じ境遇にある誰かのためにと、勇気をもって取材に応じてくださった深田澪音さんとご家族に、改めて深く感謝申し上げます。

以上

本件問い合わせ先：コンプライアンス局広報部